

公開講演会

# 新しい世界史叙述と歴史学入門を目指して

— 阪大史学系の取り組みから —

桃木至朗

## 一・本稿の課題と筆者の自己紹介

この原稿では、高校など中等教育段階における歴史教育の仕組みと問題点という、大学側の歴史研究者の理解がひどく遅れている課題を概観したうえで、それに対する大阪大学その他の取り組み、とりわけ大阪大学で出版した教養課程用の世界史教科書について紹介させていただく。

本論の前に自己紹介を兼ねて、筆者の専門と教科書執筆歴について書いておきたい。欲張りな筆者の専門領域は三つある。院生時代の一八八〇年代から研究している中世・近世のベトナム（一〇〜一八世紀）を中心とした東南アジア史<sup>1</sup>に加えて、一九九〇年代から東・東南アジアを中心として日本列島も含む海域アジア史に手を広げ、関西の仲間

たちと海域アジア史研究会を創立した<sup>2</sup>。さらに二〇〇〇年代に入ると、世界史教科書・解説や入門書の編集・執筆と、歴史学の見直しや世界史教育の再建のための評論・解説活動に本格的にかかわり、後述する大阪大学歴史教育研究会の代表をつとめることにもなった。

つぎに教科書執筆歴だが、『新編高等世界史B』（帝国書院、一九九八年、二〇〇三年）、同『新詳世界史B』（帝国書院、二〇〇八年、二〇一三年）と続いた高校世界史B教科書の執筆以外に、後述する大阪大学歴史教育研究会編市民のための世界史』（大阪大学出版会、二〇一四年）の編纂にも加わった。高校教科書では東南アジア史のほか、日本を含むアジア海域史や「世界の一体化」のアジア部分、二〇一三年版の世界史の扉（気候変動、暦、琉球・アイ

又からみた世界史）なども執筆し、『市民のための世界史』では東南アジアを除くと近世・現代アジア史をおもに担当<sup>③</sup>。特定の時代・地域に属さないコラムも多数執筆した。

このうち、高校教科書の東南アジア史部分では以下の執筆意図をもっていた。最大のものは、学界から高校教員・高校生までに一般的な「遅れた」「貧しい」「かわいそうな」東南アジア、「外部から影響を受けるばかりの」「日本とは無縁の世界」という偏見を打破することである。ただし東南アジアは、ヨーロッパや中国以外の新興領域でももっとも教えにくい／学びにくい地域である。定着したわかりやすい構図がない一方で、語句・事項はアフリカやラテンアメリカよりはるかに多いからである。そこでまず、基本構図の明確化と羅列でない説明、語句選定と表記の標準化<sup>③</sup>などが必要と考えた【資料1】。ついで（教師用の解説【資料2】などで補足が必要だが）興味深い材料の提示と、日本や現代世界にとってどんな関わりや意味があるかの解説なども心がけた。

## 二．歴史教育の危機と高大連携

つぎに、日本の歴史教育を取り巻く現在の状況を、高校・大学を中心に簡単に説明しておこう<sup>④</sup>。二〇一五年春までの状況は再三取り上げてきたところだが、大学人にまだまだ認識が共有されていないのは、きわめて深刻な事態である。

現行（一九九四年度入学者から施行）の高校世界史必修のしくみは、高校での地歴（地理歴史）科と公民科（現代社会、政経、倫理）の分離および、中学校社会科歴史では日本史のみ（外国史は日本史に関係のあるところだけ）を教える仕組みに対応してつくられたもので、世界史A（二単位<sup>⑤</sup>、近現代中心）または世界史B（四単位、伝統的な通史）と、日本史（AまたはB）・地理（AまたはB）のうちの一科目を必修と規定している。そのとき以来、普通科高校の生徒は地理・日本史・世界史をすべて履修するといふかつての仕組みは消失したのだが、地歴科教員は若手も含め、自分の専門科目についてはBの履修者ばかりだし、大学入試で要求されるのはほとんどBなので、「Bが本業、Aは片手間」という発想を変えなかつた。

加えて全体的な授業時数不足の中で、全校必修の世界史としてBを開講できる学校は少なく、多くの高校では、（本当の不開講Ⅱ履修漏れはごく少数としても）必修で世界史

Aを開講<sup>⑤</sup>、そのあと生徒はコースや入試科目に合わせて世界史・日本史・地理のどれかのBを学ぶことになる。ところが世界史は日本史・地理に比べ暗記事項が圧倒的に多いので時間が足りず、多くの高校が必修の世界史Aにおいて「世界史Bの前半もしくは後半」を教え、残った部分は入試で世界史Bを受験する生徒のみに教えるという対応を余儀なくされている。その結果、入試で世界史を受験する生徒（センター入試の世界史受験者はコンスタントに減少して、四〇万人近い地歴受験者のうち現在は九万人程度）以外は、「世界史Bの半分だけ教えられてなんだかわからずに終わったし、入試で選択しないからそれをわかるように努力する必要も感じない」状況で卒業する。つまり少数のセンター入試世界史受験者以外の世界史の知識・理解は昔よりずっと後退しているのである。ところが大学教養課程でそれを補う体系的な世界史像やアジア史像の教育はほとんどおこなわれず、高校での世界史Bの暗記を前提とした「〇〇史の諸問題」式の教養科目が今でも多い。

これに対して日本学術会議が、二〇一一年八月に提言「新しい高校地理・歴史教育の創造 グローバル化に対応した時空間認識の育成」「日本学術会議 二〇一一」を发表し、各分野の学会による高校で教えるべき内容の精選、世界史必修にかわる必修科目「地理基礎」「歴史基礎」の

開設などを提案した。文科省も実験校などに委嘱して内容の検討を進めた。ただし、「世界史と日本史の統合」「アジア重視」「講義―暗記だけでなく調べる、発表する、討論するなどの内容を大幅に増やす」といった大枠は一致しても、入試への位置づけ、世界史と日本史の割合や通史型か近現代史中心型かなどの点は意見が分かれていた。その後、二〇一四年六月一三日の第二次提言「再び高校歴史教育のあり方について」「日本学術会議 二〇一四」では単元案が出され、油井氏を中心とする「高校歴史教育研究会」による高校・大学教員へのアンケート（六八〇人あまりが回答）や世界史・日本史Bの教科書・入試における用語制限提案なども行われたが、「地理基礎」と比べると科目としての制度設計は遅れている。学会ごとの教育内容検討も東南アジア学会など一部を除いて不活発である。教育再生実行会議などが提案する大学入試改革案との関係もあり議論されていない。これらの議論を前進させるべく、二〇一五年七月に全国組織「高大連携歴史教育研究会」が設立され（<http://www.kodairen-u-ryukyu.ac.jp/>）、学術会議提言のまとめ役でもあった油井大三郎教授が会長に選ばれた。同会では、（1）高等学校の世界史・日本史教科書改革と思考力育成型授業のあり方、（2）各地の教育実践や史料集作成などの交流とデータベース構築、（3）高

新しい世界史叙述と歴史学入門を目指して(桃木)

等学校における歴史系新科目のあり方、(4) 大学入試・高校新テストなどの検討や歴史系出題のあり方、(5) 大学における歴史系の教養教育や教員養成課程のあり方の五つの部会を設け、高双方の教員の協力(大学側では歴史系・教育系双方の協力も重要)のもとに各課題の検討をおこなおうとしている。必要な問題については、下記の学習指導要領や入試改革に関する提言も作成する意志をもつ。

他方、政界(＝必ずしも財界ではない)では歴史修正主義などを背景に、「日本史が高校の必修科目でないのはおかしい」という政治的圧力が強まり、首都圏の都県教委独自の必修化などを経て、文科省も二〇一四年一月に中教審に「日本史必修化など」を諮問した。二年程度で答申が出され、その一年後には学習指導要領を改訂、高校では二〇二二年度から実施、というスケジュールが見込まれているが、二〇一五年八月の中教審特別部会では、おそらく上記学術会議提言やアンケートの効果などもあって、単純な日本史必修でなく、日本史と世界史を統合した新しい必修科目「歴史総合」の設置を、「地理総合」や公民科における「公共」などと並んで提案した<sup>1)</sup>。なお、中教審の審議の焦点はこうした科目編成よりも、入試改革と連動した「アクティブラーニング」の全面導入にあるとされる。高校や中学・小学校の教育現場では、新科目の内容(たとえば日

本史と世界史の割合)や新しい教授法について、十分な研修の機会や教員の自主性が保証されるかどうかについて、不安の声も上がっている。大学側では、入試や教養教育をどうするかが問われる。地歴のA科目は廃止され、歴史総合・地理総合以外には現行のB科目に相当する科目が残るはずだが、そこで「一番入試の点数が取りにくい」世界史の履修者は激減することが明らかである。それは(教養課程などで対策を講じない限り)大学で外国史を学ぼうとする学生数や、世界史教員の採用数の減少にも直結するだろう。これはすでに学部生が極端に減っている東洋史だけの問題ではなく、西洋史はもちろん外国語系・国際系の大学にとっても痛手ではないか。また日本史は万々歳とか、国立と違って私学は安泰などの考え方は中長期的にも成り立つだろうか。

### 三. 「阪大史学の挑戦」

これも再三紹介してきたが、大阪大学史学系<sup>2)</sup>の歴史教育の取り組みについて、最小限の紹介をしておこう。

その中核をなすのは、二〇〇三年以来の高校教員との協力を土台として、二〇〇五年一〇月に設立された大阪大学歴史教育研究会(以下「歴教研」と略称。<http://sites>、

google.com/site/ourekikyō) <sup>13)</sup>である。歴教研は、大学院演習を兼ねた月例会中心の活動を今日まで継続してきたほか、各地の高校教員組織や自治体、大学その他の協力事業、アジア世界史学会 (AAWH) を通じた国際発信・交流などを進めてきた。おもな活動内容は、教科教育法の研究会のような「教え方」ではなく、現在の歴史教科書の背景にある新しい研究潮流やその成果を、コンパクトかつ従来の教科書との違いがわかるかたちで解説すること（十関連した高校・大学現場での実践報告、各地の活動の情報交換）<sup>14)</sup>にあり、それはグローバルヒストリーなど「先端研究のアウトリーチ活動」の一環という機能ももつ。

参加する研究者や大学院生（研究者志望、中高教員志望の両方が含まれる）にうるさく言っていることだが、研究者の歴史教育への関与は教科書と指導書を書いたらそれで終わりとはいかない。新しい領域の斬新な成果ほど教育現場を戸惑わせ多くの誤解を生むので、資料集や教師向け解説とQ&A、参考図書の案内、従来の理解との違いの丁寧な説明、小ネタやエピソードの紹介など、学部卒の教員にも理解可能なかたちでの総合的かつ系統的な取り組みが必要であり、それを院生や教科教育法の教員だけに任せるのは、「製造物責任」ないし「品質保証」の点から言って無責任である<sup>15)</sup>。

史苑（第七七卷第一号）

また、学会発表のような研究者側の論理で選ばれた小さなテーマは効果的でない。高校教員はそれを何千回聴いても、世界史教育全体をどうしたらよいのかわからない（そこで自分で考えろというのは学部卒の教員には無理難題である）<sup>16)</sup>。同様に、高校現場の状況や世界史、地歴史・公民科の全体を考えずに、多くの分野が「あれが足りない、これを入れる」とやった結果おこった世界史教科書のパンクに無反省なまま新しい内容を紹介しても、現場の反発を買っただけである「桃木 二〇一」<sup>16)</sup>。この観点からわれわれは、各分野の学会で、（１）既存のメジャー領域でスクラップすべき事項や、世界史教科書全体のあるべき構図も示した上で新しい記述を提案する、（２）新しい記述や用語は基礎レベル、上級レベルなど階層分けをして提示する、の二つを強く主張してきた。これは分野ごとの学会で、世界史全体を見ながら歴史教育に取り組む専門家が「必要だ」ということを意味する<sup>20)</sup>。

さらにわれわれは、大学側から高校側に一方的に教える活動に終わらせずに、高校側の状況や意見を反映させながら、大学教養教育（「高度教養教育」も）、さらには大学院まで含めた専門教育や教員養成課程も総合的に改善するための取り組みを、順次展開してきた。目的は、①高校で歴史を十分学べなかつた学生も含め国際人として活躍するの

新しい世界史叙述と歴史学入門を目指して(桃木)

に必要な知識・理解の提供(教員・研究者志望の学生に必要な、細かく膨大な知識を大づかみにまとめる方法の提示も兼ねる)、②高校で「世界史(日本史) Bの丸暗記」でない歴史教育ができる教員の養成、大学で適切な入試の出題や教養教育・教員養成教育、「タコソボ型」でない専門教育ができるような「研究者」の養成のふたつである。①に対応して、教養課程と高度教養教育プログラムで「市民のための世界史」を二〇一五年度は計六クラス開講。②のためには、(i)刷新された史学概論に当たる「歴史研究の理論と方法【資料3】」および「歴史学のフロンティア」のふたつの「歴史学方法論講義」、(ii)プレゼン・他流試合の訓練をする「世界史演習・歴史教育論Ⅰ演習」(Ⅱ歴史教育研究会)などを開講し、研究者や教員を志望する学生には、①と②-(i)(ii)の三点セットをすべて履修するよう奨励している。

#### 四・教科書『市民のための世界史』

つぎにいよいよ、教科書『市民のための世界史』の紹介にうつる。同書の詳しい紹介の活字化は初めてである。この教科書と同名の授業は、教養課程(全学共通教育)の全面再編がおこなわれた二〇〇七年度に「市民のためのア

ジア史」「市民のためのヨーロッパ史」を各一クラス試行、翌年度から「市民のための世界史」という講義題目に統合するとともにコマ数を徐々に増やして現在まで続けられているものである。高校時代に世界史を体系的に学べなかった学生を主な対象とし、二〇一三年度までは高校世界史Bの教科書(十担当教員が作成したプリント)を使用したが、しかし以下の理由で、当初から純粋な「高校の補習」は想定していなかった。

すなわちこの授業は、高校のように語句・事項の暗記を目的にせず、毎回の小テストなどを通じて大づかみな構図を把握しそれをもとに考えたり論じることが重視し、それに必要な大学レベルの概念や時事問題の知識を要求する。また高校教科書を支配しているヨーロッパ中心史観を再生産することなく、アジアを正当に位置づけ日本を完全に組み込んだ世界史を目ざす。講義の重点は担当者により様々。そのことと高校教科書の使い勝手の悪さなどを考えて、二〇一一年度から独自教科書編纂を計画し、二〇一四年春に刊行したのである。<sup>②</sup>

教科書の構成であるが、大学の授業用なので、【資料4】に示した通り便宜的に一五章に分けた。歴史を学ぶ意味やこの本の性格・狙い、人類の出現と世界の地理について書いた序章、歴史学の大づかみな方法と動向、専門的に学ぶ



方法／学ぶ場所と参考文献を書いた終章の間に、一三章の本論が挟まれている。本論はオーソドックスな時代順の通史で、詳しくは高校なら世界史AとBの間で、くらいである。近世はかなり長い古代・中世が短く、一九世紀をかなり重視するが現代史も三・一以後の展望まで構図を明示しようとしている。

各章には冒頭に「章のあらすじ」と「読者への問い」を置き、本文の間には注や図版のほか、コラム・史料、「課題」を配置、章の最後には「まとめの課題」を掲げた。この教科書の作り方が通常の高校教科書と違うのは、重要用語（用語集頻度の高い語句）をまずリストアップしてそれを文章化する、というやり方を排除したことである。受験教育でまず問題にされる用語・事項の総数は、「章のあらすじ」を除き注、コラム、図表、地図などをすべて数えても二六〇〇個弱である。そこに含まれる人名、事件・制度名はほとんど中学並みである一方で、「綿花」「茶」などモノの名前、「近代世界システム」「財政軍事国家」など学術上の概念や、「地球温暖化」「人間の安全保障」「集団的自衛権」など「現代用語の基礎知識」的な用語・事項を大量に含む。

適切な用語表記への配慮としては、高校教科書独特の表記法より新聞・テレビで通用している呼称に合わせた場合

史苑(第七七巻第一号)

も多い。例えば国際組織名は必ず日本語でフルに書くのではなく、NATO(北大西洋条約機構)、PIO(パレスチナ解放機構)など通用しているローマ字略称を先に書きカッコ内に日本語フル呼称を示す方式を用いた。カタカナ表記も無理に「現地語表記」をせずに読みやすい慣用語表記に合わせたものが少なくない。ヴェトナム↓ベトナム、パレスティナ↓パレスチナなどがその例である。

記述内容に移ると、「ヨーロッパ偏重」は断固排するが(フランスが最大の被害者か)、各時代の世界の構図と東部ユーラシアないし東アジアの歴史、そこでの日本/日本列島の位置づけを重視する一方、紙幅を考えて、南アジア・西アジアやアフリカ、ラテンアメリカなどの諸地域については満遍なく記述することは放棄した。イギリス帝国と産業革命などの新しい理解がクリヤーに示されただけでなく、隋唐帝国やモンゴルと明清帝国の新しい理解、大航海時代から近世後期までの東アジア諸国の共通点と差異、それらの中での「日本的伝統」の形成など、海域アジア史を含む最新の研究を土台として、現代の東アジアと日本を取り巻く諸問題を考える材料を提供したところにも注目していただきたい。

政治・経済や生活・環境などの大づかみな変動を軸に論述したので、文化史とくにハイカルチャーは手薄だが、気

候変動など環境史をあちこちに書いたし、ジェンダー史についても可能な章では、「特別扱いでなく普通に書くこと(ジェンダー主流化)」を目ざした。日本の「家」の形成を複数個所で取り上げ、東アジアの少子高齢化問題を本論(一三章)の最後の問いに置いたのも、その試みの一部である。また理系学生が多数派である総合大学の教科書という性格上、近代世界における自然・世界や人間に関する認識の変遷とその社会への影響、歴史学(序章・終章ととくに詳しく説明)を含む近代諸学の特徴などの説明につとめ、コラムや終章で学説史・論争史の紹介も行った。

歴史の流れや構図を示す本文に対して、理論や類型にかかわる問題を大コラムで説明した。またコラムでは、グローバルな関連や比較、社会史的テーマやポスト・モダニックなトピックなどの紹介にもつとめた。コラムの多くが「課題」に連動しており、高校教科書のように「入試に出ないコラムは読まなくてよい」とはならない。「読者への問い」やコラムで、「マスコミや社会科学系などによく見られる通俗的・非歴史的な理解」への注意喚起にもつとめた。

ただし、歴史の面白さはしばしばエピソードやトリビアに宿る。通常の教科書ではコラムをそうしたものの紹介にあてることがよく行われるが、この教科書はそこを犠牲にしている。別の教材との併用や、授業中の補足が望ましい。

最後にこの教科書の読み方・使い方が、教養課程の学生や専攻外の学びを必要と感じた院生が、多様な知識・理解を身につけたりそれぞれの専門に即した/現代的意味を持つ関心を抱くのに使えるはずである。受講者の多い教養課程では概要の講義が精一杯だが、高度教養教育では毎回グループディスカッションをおこなうなど、アクティブラーニングに近い授業ができる。教養課程でも教科書は指定箇所を読んでくるものとして逐一解説はおこなわず、毎回の小テストで授業のまとめや教科書中の課題の論述をおこなわせると、たとえば「モンゴル帝国とアメリカ合衆国の共通点」などについて、面白がってポイントをつかんだ答案を書く学生も(医学系、工学系などでも) つぎつぎ出してくる。

他方、「教員・教員志望者や社会人の知識の整理とアップデート」や「高校生の論述入試対策」、「学部生の大学院入試対策」などにもこの教科書は有益なはずである。しかし、既存のどの教科書とも地域・時代別の紙幅の配分が違うこともあって、高校教科書の用語精選の直接的モデルにはならないように思われる。教員の間では、刺激を受ける、参考になるという好意的反応の一方で「これ一冊という決定版の教科書を期待し、裏切られたと感じて失望した」という声が聞かれるのも事実である。内容・行論に対して、



狭義のグローバルヒストリーの本（帝国主義や覇権の側から世界史を見て、地域や民族の「主体性」を軽視している）と即断する向きも少なくはないのかもしれない。

それに対して強調しておかねばならないのは、この教科書が *The World History for Citizens* ではなく *A World History for Citizens* という英文タイトルをもつ（カバー参照）事実である。これを正史・正典とするのではないことを踏まえた読み方が求められる。決定版の教科書を求めるのは、用語・事項について「あれがない、これが足りない」とあげつらうのと同様に、明らかな筋違いなのである。これとは違った力点、違った構図で書かれた世界史教科書が編まれても当然である。

## 五・まとめと問題提起…新しい教科書を可能にする専門教育と教員養成教育

最後に、今後の教科書執筆とその教育に必要なことを三点あげておきたい。

第一は良い教科書の編纂に必要な条件だが、事典の編纂と項目執筆などの経験から考えても、全員とはいかなくても以下の条件を備えた研究者が一定割合で執筆に加わっていることが必要だろう。(1) 世界史全体や自分の専攻分

野（例…中国史、経済史、現代史…）の全体を見ていること、(2) 無前提に自分の専門と専門家の立場を中心に置かない柔軟な発想、(3) 読者（高校なら高校の教育界と生徒の状況）や紙幅に合わせた適切な表記・表現能力。これらは歴史研究の「専門を極めた末」にしか身につかない視野・能力というより——それではごく少数の人間にしか身につかない事態を肯定することになる——、専門とは別の能力ではなからうか。

第二は、教科書を書くのは「ベテランの達人」でなければ「専門研究の落ちこぼれ」だなどという発想を許さない教員養成と専門教育である。ここでは特殊講義と職人芸を仕込むゼミの羅列ではない教育が必要であるし、単なる「ヨーロッパ歴史哲学史」ではなく、歴史学の学としての特徴と主要下位領域、それらの変遷を示す史学概論、世界史全体の構図を教える講義、それに専門外に向けた自分の専門以外の発表も含めたプレゼンと討論のゼミなどが必須となる。それに合わせた教員採用人事やカリキュラムの再編も求められる。余談だが、「従来の仕組みのまま良い専門研究だけしていてもダメだ」ということを理解する力は、専門能力かそれとも教養の力だろうか。歴史学など人文学における「対象・方法・目的」（要するに専門性）のありかたは、自然科学や社会科学のそれと同じかどうかを省察

新しい世界史叙述と歴史学入門を目指して（桃木）

することは、あるべき「教養」を考えることと連続しているように思われる。

この点に関連して阪大歴教研では、歴史教育改善のためには世界史の全体像と並んで歴史学の全体像も理解する必要があると考えて、二〇一四年度から科学研究費（基盤研究A）「研究者・教員・市民のための新しい歴史学入門」（代表・桃木至朗。二〇一七年度まで）を獲得し、研究者志望だけでなく初中等教育の教員を目ざす学生、広く歴史学に関心を持つ市民・知識人に理解できるような、新しい歴史学入門のモデル構築と入門書の作成を目ざしている。達成すべき内容は、

（1）歴史学の対象・方法と目的・意義、それらの発展・変遷などを概観するが、従来型の「西洋思想史の一環としての歴史認識についての概論」でなく、非西洋世界を含んだ歴史学全体を扱う。

（2）「言語論的転回」などのパラダイム変化を踏まえつつも特定の潮流には偏らずに、史料や時間・空間設定などに関する理論・方法論、それに政治史や経済史、文化史、環境史などサブ領域ごとの状況を総合的に紹介し、最近の世界史や日本史の教科書・一般書における激変「例：『市民のための世界史』」の背景が

わかるものとする。

のふたつである。

また、教科教育学で常に論じられ欧米のモデルもよく紹介されるが、日本の状況に合わせた体系化や階層化が必ずしもなされていない「歴史的思考力」とは何かについての議論が、アクティブラーニングの形式だけでない系統的研究とあわせて、別途組織的におこなわれる必要があるだろう。

第三の問題として、私立大付属校の意欲的な教育と親大の入試での「難問奇問」のギャップは埋められないものだろうか。アクティブラーニングの導入など暗記だけではない新しい授業を、（一部は受験の成績も落とさずに）展開しているのは教育系の国立大付属校だけではなく、有名私大の付属校でも各地ですぐれた授業実践をおこなっており、そこではたいがい受験専用でない教科書を使用している。では名門（マンモス）私大の入試で、暗記だけでない入試問題は不可能だろうか。あるいは、マークシートや選択・穴埋め式で問えるのは暗記知識だけか。文科省の大学入試改革でもこの問題で苦慮していると聞かすが、アメリカのSAT（大学進学適性試験）などを考えれば、まだやりようはあるはずである。面倒でも教育系や高校教員任せに

せず、これらの問題を少なくとも五年とか一〇年のスパンで考える人文系学部の歴史研究者があちこちに出てくると、人文系にもそういう研究者を採用できる仕組みを用意すること、理系であればある意味当然なそういう事柄が実現するか否かに、歴史教育と教科書の未来もかかっているというのが、筆者の意見である。

#### 参考文献

- 秋田茂・南塚信吾他（編）二〇一六「われわれが目ざす世界史」『世界史』の「世界史」（ミネルヴァ世界史叢書・総論）ミネルヴァ書房。
- 秋田茂・桃木至朗（編著）二〇〇八『歴史学のフロンティア 地域から問い直す国民国家史観』大阪大学出版会。
- 秋田茂・桃木至朗（編著）二〇一三『グローバルヒストリーと帝国』大阪大学出版会。
- 荒川正晴・中村薫 二〇一二「大学教養課程での世界史教育についての調査報告」大阪大学歴史教育研究会第五八回例会報告（三月三〇日）(<http://sites.google.com/site/ourekikyokiroku/kinoku-2011/pdf/120330a.pdf>)。
- 稲田義智 二〇一四『絶対に解けない大学入試』社会評論社。
- 大阪大学歴史教育研究会 二〇一〇『成果報告書シリーズ 三 京都高社研世界史読書会『世界史をどう教えるか』の記録』。
- 大阪大学歴史教育研究会 二〇一二a『成果報告書シリーズ 五 阪大史学の挑戦2』。
- 大阪大学歴史教育研究会 二〇一二b『成果報告書シリーズ 八 第二回AAWH（アジア世界史学会）報告集 ソ

新しい世界史叙述と歴史学入門を目指して(桃木)

ウル・梨花女子大、二〇一二年四月二七・二九日』。  
大阪大学歴史教育研究会(編) 二〇一四『市民のための世界史』大阪大学出版会。

大阪大学歴史教育研究会・史学会(編) 二〇一五『教育が開く新しい歴史学』(史学会一二五周年リレーシンポジリーズ第一巻) 山川出版社。

大阪歴史科学協議会 二〇〇九「特集 歴史学と歴史教育のあいだ」『歴史科学』一九七号、一―三〇頁。

小川幸司 二〇一―一―二『世界史との対話 七〇時間の歴史批評(上中下)』地歴社。

懷徳堂記念会(編) 二〇〇八『世界史を書き直す・日本史を書き直す 阪大史学の挑戦』和泉書院。

神奈川県高等学校教科研究会・社会科部会歴史分科会(編) 二〇〇八『世界史をどう教えるか 歴史学の進展と教科書』山川出版社。

久留島典子・長志珠絵・長野ひろ子(編) 二〇一五『歴史を読み替える ジェンダーから見た日本史』大月書店。

高等学校歴史教育研究会 二〇一四 a 「歴史教育における高等学校・大学間接続の抜本的改革を求めて(第一次案)―世界史B・日本史Bの用語限定と思考力育成型教育法の強化」

(<http://sites.google.com/site/ourekikyo/news/pdf/140yui-teigen.pdf>)。

高等学校歴史教育研究会 二〇一四 b 「歴史教育における高等学校・大学間接続の抜本的改革」(<http://sites.google.com/site/ourekikyo/news/pdf/1409yui-survey01.pdf>)。

中村翼・後藤敦史・向正樹・中村武司 二〇一五「若手研究者の連携と協働に向けて」大阪大学歴史教育研究会・史学会(編) 二〇一五、三六―五五頁。

日本学術会議 二〇一―「提言 新しい高校地理・歴史教育の創造―グローバル化に対応した時空間認識の育成」(<http://www.sci.go.jp/ja/info/kohyo/division-15.html>)。

日本学術会議 二〇一四「提言 再び高校歴史教育のあり方に」(<http://www.sci.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-1193-4.pdf>)。

星乃治彦(監修)・福岡大学人文学部歴史学科西洋史ゼミ(編著) 二〇一〇『学生が語る戦争・地域・ジェンダー』法律文化社。

星乃治彦・池上大祐(監修)・福岡大学人文学部歴史学科西洋史ゼミ(編著) 二〇一三『地域が語る世界史』法律文化社。

三成美保・小浜正子・姫岡とし子(編) 二〇一四『歴史を読み替える ジェンダーから見た世界史』大月書店。

桃木至朗 二〇〇一 『歴史世界としての東南アジア（第二版）』（世界史リブレット一二） 山川出版社。

桃木至朗 二〇〇九 『わかる歴史、面白い歴史、役に立つ歴史―歴史学と歴史教育の再生をめざして』 大阪大学出版会。

桃木至朗 二〇一一 『ジェンダー史と歴史教育』 長野ひろ子・姫岡とし子（編著）『歴史教育とジェンダー』教科書からサブカルチャーまで』 青弓社、二一五―二二六頁。

桃木至朗 二〇一二 『全体を見る、違った世界にまたがって生きる』日本の『歴史業界』再生に向けた一方策』『歴史の理論と教育』一三八号、一五―四九頁。

桃木至朗 二〇一四 『大学における専門教育・教員養成教育の刷新―歴史教育における高大連携の新しいかたち』『九州歴史科学』四二号、八九―九七頁。

桃木至朗 二〇一五 a 『現代日本における大学教養教育とそこでの世界史の位置』シンポジウム「歴史的教養とは何か―大学における歴史教育の新たな展開をめざして」（二月二一日・於東大駒場キャンパス）。

桃木至朗 二〇一五 b 「制度の壁か思考の壁か？ 暗記オンリーでない歴史の試験を目ざして」日本学術会議公開シンポジウム「歴史教育の明日を探る―」授業・

教科書・入試」改革に向けて」（八月一日・於日本学術会議）。

桃木至朗・大阪大学歴史教育研究会 二〇一五 「高大連携で取り組む歴史教育の総合的改善」『歴史評論』七六九号、二五―三四頁。

桃木至朗他（編） 二〇〇八『新版 東南アジアを知る事典』平凡社。

桃木至朗・堤一昭・秋田茂・飯塚一幸 二〇一五 『阪大史学系の新しい教育』大阪大学歴史教育研究会・史学会（編）二〇一五、一〇―三五頁。

桃木至朗・山内晋次・藤田加代子・蓮田隆志（編）二〇〇八『海域アジア史研究入門』岩波書店。

与那覇潤 二〇一一 『中国化する日本』文藝春秋。

註

- (1) 東南アジア史に関する高校教科書執筆や、九八年版教科書と同時期に執筆した「世界史リブレット」「桃木二〇〇一(初版一九九六)」、それに後述する解説(「資料2」参照)などの背景に、報告者が阪大教養部に勤務してから今日まで続けている教養課程での東南アジア通史の授業(現在は「専門基礎科目・アジア史学基礎C」という科目名)がある。また報告者が参加している東南アジア学会(旧東南アジア史学会)では、二〇〇八年度から学会大会ではほぼ二年に一度、世界史を中心とした高校での東南アジア教育に関するシンポを開き、科研費などを利用しながら高校・大学での東南アジア史教育のあり方と内容の検討を進めている。現在は基礎・標準・上級の三層に分けた用語リストの作成が進められており(学会ウェブサイト <http://www.jssas.org/glossary/> に試案掲示中)、その最初のたたき台は、東南アジア史のあらゆる主要な学説・理論、時代ごとの整理のポイント、世界史における東南アジア史の意義と面白さ(日本史との関連・比較を含む)、従来の教科書や入試の間違いと問題点などの解説と合わせて、「桃木二〇〇九(一部は「桃木二〇〇二」「桃木他二〇〇八」などでも)で提示しておいた。
- (2) 一九九三年に創立されたこの会のメンバーや研究成果「桃木・山内・藤田・蓮田(編)二〇〇八など」は、次項の歴史教育活動に深く関わっている。
- (3) 民族・宗教や国家などどれもが多様な東南アジアでは、特定部分に偏らずに記載事項を選ぶことが簡単でない。しかも地域研究の発達は、東南アジア専門家以外が東南アジア史を正確に理解することを難しくした。ところが、十数種あった当時の世界史教科書の中で東南アジア史の専門家を執筆に起用したのは三〜四種に過ぎず、不正確かつ偏った記述が少なくなかった。そういう状態で、東南アジアについても「用語集頻度が高い」語句や事項を教え入試に出題するという仕組みは、なら学問的な正当性をもたなかった。また言語的に多様な東南アジアでは、注一四で後述する不適切なカタカナ表記や訳語の例がきわめて多かったのも、そもそもカタカナで正確に表記できない発音が多いという前提に立った上で、妥当なカタカナ表記の提示に努めることが急務であった。
- (4) 中学・高校の歴史教育の仕組みと世界史教育の困難については「桃木二〇〇九」「高等学校歴史教育研究会二〇一四a、二〇一四b」など参照。
- (5) 小中高校の授業は制度上では年間三五週が標準とされている(二単位科目は七〇時間、四単位科目なら一四〇時間)。ただし実際は、学校行事や試験のために三〇週も出来ないのが普通である。教科書編纂などの際にこのことへの配慮が皆無な点が、歴史が「最後まで教えられない」一因と思われる。
- (6) 毎年の教科書の販売部数(『教育時報』誌などで公表される)で見ると、世界史Aが八〇数万部に対しBは五〇万部程度出ているが、これは下のような「Bの半分だけ学ぶ」生徒も相当数含んでいると思われる。
- (7) 「荒川・中村二〇一二」。大学教養教育における歴史教育のあるべき姿については「桃木二〇一五a」でも論じた。



(8) 地理とも統合した「地歴総合」案もあるが、歴史学界と地理学界の方向性の違い、標準で六単位程度の地歴科の枠の中で四単位の必修科目を作ってしまうと他の選択科目を入れる時間がなくなるなどから、あまり支持を受けなかった。

(9) 「高等学校歴史教育研究会 二〇一四 a、二〇一四 b」(いずれも大阪大学歴史教育研究会、比較ジェンダー史研究会 その他のウェブサイトに掲載してある)。

(10) 「高等学校基礎学力テスト」が二〇一九年度、「大学進学希望者学力試験」が二〇二〇年度から実施される予定である。

(11) 中央教育審議会(第100回) 配付資料54「高等学校等における教科・科目の現状・課題と今後の在り方について(検討素案)」([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijyoku/\\_icsFiles/afieldfile/2015/08/10/1360841\\_5\\_4\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijyoku/_icsFiles/afieldfile/2015/08/10/1360841_5_4_1.pdf))。

(12) シルクロード(中央ユーラシア) 古代史、東南アジア・海域アジア史、近現代のグローバルヒストリーなど世界を広く見渡し、積極的に世界に発信する歴史研究と、日本国家の成立(考古学)や、武士中心史観にもとづく日本中世史などの定説に対する、関西の視点を活かした書き換え、フィールドワーク(当然、中国語でおこなう)を重視する中国地域社会史など、地域の生活感覚に根ざした歴史研究の二つの方向で研究を推進してきた。日本考古学や中世史・近代史、西洋史の近代世界システム論など理論的発言も活発である。二〇一四年秋からはグローバルヒストリー研究(代表秋田茂・東洋史・日本史や文学研究科以外の教員も

参加)が、文系の研究プロジェクトで初めて、大型の教育・研究プロジェクトを統括する「大阪大学未来戦略機構」に組み込まれた(第九部門)。

(13) 最近の紹介には「桃木 二〇一四」「桃木至朗・大阪大学歴史教育研究会 二〇一五」「桃木・堤・秋田・飯塚

二〇一五」などがある。歴教研の考え方・活動方法と既存のそれとの違い、それにもとづく誤解への反論などについては「桃木 二〇〇九」「大阪歴史科学協議会 二〇〇九」

「桃木至朗・大阪大学歴史教育研究会 二〇一五」で、狭い専門を超える研究者の新しいありかたについて「桃木 二〇一二」「中村翼・後藤敦史・向正樹・中村武司

二〇一五」で、逆に史学系の各専修/専門分野の専門性を深める仕組みをどう保証しているかについては「桃木 二〇一四」「桃木・堤・秋田・飯塚 二〇一五」で重点的に述べている。会の活動を踏まえた出版物としてはほかに、「世界史リブレット」「日本史リブレット」「興亡の世界史」

その他におけるメンバーの著作や、「秋田・桃木至朗(編著) 二〇〇八・二〇一三」「懷徳堂記念会(編) 二〇〇八」などもある。

(14) ホームページの「活動報告」欄に各例会のレジュメ等がアップロードされているほか、活動報告書が第一三冊まで出ている。その中には近代世界システム、中央ユーラシア古代史など阪大の得意テーマに関する詳しい解説と基礎・上級などレベル分けした用語リスト「大阪大学歴史教育研究会 二〇一二 a」、神奈川教員団が出版した話題を呼んだ新しい教科書内容の地域/時代別の解説「神奈川県高等

新しい世界史叙述と歴史学入門を目指して(桃木)

学校教科研究会・社会科学部会歴史分科会(編)「二〇〇八」に対して京都教員団がおこなった連続合評会の記録「大阪大学歴史教育研究会 二〇一〇」、第二回アジア世界史学会での関係報告を集めた報告集「大阪大学歴史教育研究会 二〇一二b」、それに各年度の院生報告集(異なる専門分野に属する履修者にグループを作らせ、各自の専門とは無関係なテーマを設定して、歴史教育に反映させるべき研究成果についてグループ報告をさせる)などが含まれる。

(15) 教科教育法の専門家に任せられない重大事のひとつは、適切なカタカナ表記や訳語の提示である。細かいところにこだわっても仕方がないのだが、しかし例えば「なゼヴェトナムは無意味でベトナムで十分か」「イスラームという長音表記はインドネシア史に適用できるか」などは、多くの歴史研究者が考えるように「どうでもいい事柄」ではない。カタカナと発音の関係について無頓着な研究者は、読点の打ち方について考えたことのない研究者と同様に、教育(実は研究も)の現場を混乱させている。

(16) 現在では多くの大学と大学教員が高校教員向けの講演をおこなっているが、大半は自分の都合で選んだ小さなテーマの講演がおこなわれているように見える。実例は自分の「持ちネタ」を使うにせよ、枠組みはより大きなものを設定し、それに関する教科書記述とその問題点を一通りチェックしたうえで講演に臨むべきである。その点で参考になるのは、神奈川県の高教科研究会の世界史分科会が二〇〇七年度から毎年夏季に三日間かけて開催している高大連携セミナーである。毎年一九世紀、二〇世紀など特定の時代のアジア史をテーマとして、西アジア史、南アジア

ないし東南アジア史、東アジア史の三つを一日ずつ取り上げ、午前中は高校教員と専門研究者がペアになって高校生(複数の高校から参加)向けの講義を行い(高校教員が受験のまよめ的な内容、専門研究者が大学への誘いのな内容を話す)、午後をそれに関する質疑・討論に充てるもので、高校教員だけでなく専門研究者側も、テーマ全体を意識した話題の組み立てを強いられる。これは、高校生の大学進学に向けた動機付け、他府県を含む教員・研究者の研修の両面で、明らかに目立った効果を上げている。

(17) 二〇〇九年の歴史学研究会大会特設部会「社会科学世界史六〇年」での小川幸司報告「苦役への道は教師の善意で敷きつめられている」「小川 二〇一〇―二〇一〇の上巻(二〇一一年)所収」がショックを与えたように、教科書の際限ない用語増は、私大の難問奇問に出た事項を教科書に取り込めという高校側の要求と、古くなった事項のスクラップをせずに新しい事項を押し込むことに熱中する学者側の両方がつくりだした状況である。なお報告者がこれまで聞いた二件の例では、『詳説世界史』を最後まできちんと解説するには「学校特設科目」も利用して全部で九単位ないし一〇単位を要したという。

(18) われわれの活動の初期には(現在でも初めて参加した教員の間では)、「高校現場はただでさえ忙しいのに、こんな難しいことをどうやって教えるというのだ(↓こちらは教員向けの解説をしているのであってその内容を直接教えるなどと言っていない)」「こんな従来と違う内容を教えたら生徒が戸惑う(↓戸惑うのは古い知識をもつ教員であって、生徒はそう教えればそう覚える)」「まず基礎知識を覚えさ

せてからでなければ考えさせる授業はできない(↓本当にそんなに多くの暗記をしないかと考えられないか?)」「これは一部進学校向けの内容か(↓「教育困難高」の教員にも面白がってもらっている。乗ってこないのは暗記入試の成績だけで動いている「中堅校」の教員)」などの反応が一般的に見られる。これらの「誤解」を解くには時間や手間がかかる。

(19) 日本学術会議のジュンダー史部会を母体として「比較ジュンダー史研究会」が、世界史教科書の枠組みに合わせた解説・資料集「三成・小浜・姫岡 二〇一四・久留島・長・長野(編) 二〇一五」の刊行、充実したホームページの開設 (<http://ch-gender.sakura.ne.jp/wp/>) などめざましい動きを見せている。

(20) 報告者が執筆した帝国書院の教科書では、最初の一九九八年版は古代から近世までの各章でそれぞれ東南アジア史を独立させて一貫した説明につとめたが、アジア各地域の執筆者がバラバラに新しさを競って全体が混乱に陥ったので、次の二〇〇三年版からはアジア史や世界史の統合的側面と整合的記述を重視し、中世・近世の東南アジア史は海域アジア史・東アジア世界史と結びつけて説明することとした。事項も一九九八年版より整理された(それで東南アジア史が弱くなったという高校側からの不満は聞かない)。

(21) 学部三年生以上および大学院生向けに、専門を超える知識・スキルや他流試合のやり方を学ぶための「知のジムナステイック科目」を開講している。これは通常の教養課程とは完全に別立てで、卒業・修了要件科目にも含まれない。

(22) 制度上の問題で授業科目名は「東洋の歴史」「西洋の歴史」に分かれたままだが、講義題目を統一して「市民」に通し番号を振っている。二〇一四年度は一学期に「市民のための世界史Ⅰ・Ⅲ」、二学期に同Ⅳ・Ⅴと高度教養科目「市民のための世界史S」をそれぞれ開講した(基礎教養科目「国際教養科目」を合わせた純粹な教養科目「専門基礎科目」は除く)の外国史系科目の半分程度をこれに充て、残りは従来通りのアラカルト型科目にする方針に従っている)。二〇一四年度の教養課程五クラスの履修者数は合計三三四人であった。うち新入生は二七二人で全新生中の七・八パーセントに当たる。高度教養教育の履修者数は一九人であった。二〇一五年度も開講クラス数は同じである。

(23) 二〇一三年一学期の桃木のプリントをたたき台として、同年に「市民のための世界史」を担当した荒川正晴・坂尻彰宏(以上東洋史)、秋田茂・栗原麻子(以上西洋史)が分担執筆した。ほかに歴教研事務局の特任研究員・院生や教科教育法の専門家、元高校教員などが校閲、資料作成などで協力した(分担一覧はあとがきに掲載)。なお本書の内容には「帝国書院の教科書(新詳世界史B)」と似た記述が頻出するが、それはこの授業がもとと同教科書を使用していたことよりも、それが構図の提示と羅列でない説明を最も重んじた教科書である点による。

(24) 内容精選イコール通史の放棄、テーマ別の歴史、いう発想は専門研究者の間ではきわめて強いが、われわれは中学・高校で一度も世界の通史を学ぶ機会のない学生が非常に多いことに鑑みて、「ラフでも一度通史を教える」ことを強く主張してきた。このように「全体を見ること」を、「単一

新しい世界史叙述と歴史学入門を目指して(桃木)

の世界観の枠にはめる」ことに短絡する非論理的な考えが根強いのは残念である。どんな世界地図も地球儀も特定の世界観を反映したものでしかありえないが、だからといって世界地図や地球儀を一切見せない地理教育があるだろうか。

(25) 全二八八頁のうち序章・終章を除いた二四八頁の内訳は、モンゴル時代までの三章が六八頁(二七・四%)、ポスト・モンゴル期から一九世紀初頭までの「近世」を扱う四章が六八頁(二七・四%)、「短い一九世紀」を扱う四章が三八頁(一五・三%)、帝国主義時代から現代までを扱う四章が七四頁(二九・八%)である。高校教科書を見ると、『新詳世界史B』(帝国書院)二〇一三年版では、四つの時代がそれぞれ三五・一%、二三・九%、一〇・九%、三〇・〇%の頁数を占めており、『詳説世界史』(山川出版社)の場合は三九・三%、一九・三%、一二・二%、二九・二%と数えられる。なお『新詳世界史B』で、ギリシア・ローマや中世・近世ヨーロッパ、それに近代アメリカについて記述するページを概算すると、モンゴル時代以前の三〇・一%、近世の七〇・〇%、一九世紀の五〇・〇%を占める。これに対し『市民のための世界史』はそれぞれ、二三・五%、五〇・〇%、五〇・〇%であり、従来の教科書における近世までのヨーロッパ偏重を是正していることがわかる。

(26) 初版第一冊が二〇〇〇部という少部数の出版では、カラー印刷や図版を多用すればひどく高価な教科書になってしまふ。著作権や作図能力の問題もあり、本書は文章資料はともかく図版や地図の点ではひどく不十分で、高校の資料集

やインターネットなどとの併用が必要である。

(27) 課題の多くにはかなり明瞭な答えが想定されており、アクティブラーニングで期待されるであろう「想定通りでない意外な答え」を受け入れる準備が十分出来ているわけではないのだが、大半が複数の角度から複数の答えを出さねばならない課題なので、「要領の良い暗記」だけで答えられるとは思えない。

(28) 一般に世界史Bの入試で暗記が必要とされる「過半数の教科書に出ている用語」(昨年までの「旧課程」では、山川出版社「世界史用語集」の「用語集頻度六以上」に相当する)は、手元にある二〇〇八年版用語集によると三七三七個ある(地名やモノの名前、概念用語などはほとんど含めず、人名・国名・王朝名や事件・制度・組織・作品などの名称に限って掲載されている中でこの数字である)。

(29) ただし、フランス革命が「人権宣言」によって女性の権利を否定したことなど、今日では高校教科書で普通に書かれている事実が編集上のミスで脱落するような失敗もあった。現在までに第四刷が出るなど幸い売れ行きは好調なので、本格改訂版の出版に向けてこうした修正可能な不十分点のリストアップを急いでいるところである。

(30) 高校でも、同志社高校(京都)の川島啓一教諭がこの教科書を使って世界史の授業(アクティブラーニングを積極的に取り入れた授業と聞く)をしている。二〇一五年三月一日の歴教研月例会(『市民のための世界史』合評会)で、概要と生徒の反応が報告されている。

(31) 高校教科書とは目的もスタイルも違うが、與那覇潤の一連の著作「與那覇 二〇一一ほか」は大いに参考になる。『市

民のための世界史」もその影響を受けた部分がある。

(32) 報告者は大学院生にしばしば『史学雑誌』の「回顧と展望」の全冊に、それも数年続けて目を通すことを、『歴史評論』の特集を毎号読むことと併せて推奨している。

(33) 阪大の三点セットの履修モデル以外では、強力な史学概論を入り口として、学会でのグループ発表「学生報告」を本にした(「星乃(監修) 二〇一〇」「星乃・池上(監修) 二〇一三) 福岡大西洋史のモデル、それに地元高校教員と協力して「静岡歴史教育研究会」を立ち上げ教員養成講座などにも活かしている静岡大学の活動をはじめ、注目すべき取り組みが各地でおこなわれている。そのいくつかは、高校での教育実践とあわせて、「大阪大学歴史教育研究会・史学会(編) 二〇一五」で紹介予定である。

(34) 稲田義智の容赦ないチェック「稲田 二〇一四」が話題になっている。「名門私大」でも「用語集を丸暗記している受験生だけが答えられる」出題がおこなわれる一方で解答不能などの出題ミスなどが跡を絶たない事態は、「出題者の忙しさ」で正当化出来る範囲を超えた、知的退廃として問題にされても仕方ないであろう。

(35) 筆者も日本学術会議のシンポジウムで、短答式やマークシート問題を使って事実そのものでなく認識や論拠を答えさせる出題の可能性を論じた「桃木 二〇一五b」。

### 補記

本論は二〇一五年三月の講演にもとづくが、読者の便を考慮して、その後の中教審の動きや出版情報などを一部に加筆してある。

### 資料1 『新詳世界史B』(帝国書院、二〇一三年版) 記述例

傍線は執筆時に重視した既存の教科書にない説明を示す。

#### (四四頁) 「諸国の興亡と地域文化の形成」

マラッカ海峡を抜ける交易ルートが発達した七世紀以降には、島嶼部に強大な国家が現れた。七世紀半ば、パレンバン(スマトラ島)を中心にマラッカ海峡を支配した港市国家連合シュリーヴィジャヤ、ついで八世紀半ばには、ジャワ島中部のシャイレンドラ朝が繁栄した。これらの国家では大乘仏教が広がり、ジャワ島にはポロブドゥール寺院\*が築かれた。一〇世紀以後には、マラッカ海峡で三仏齊(シュリーヴィジャヤの後身)が栄える一方、ジャワ島東部の王朝が、米と交換に手に入れたモルッカ(マルク)諸島の香辛料や、ジャワ島で生産したコシヨウを輸出して力を伸ばした。なかでもマジャパヒト朝は、一四世紀に、マラッカ海峡周辺を含むインドネシア群島のほぼ全域に影響下においた。

大陸部では、一〇世紀に中国から独立した北部ベトナム(大越)が、李朝以後に発展した。陳朝は元軍の侵攻を撃退し、漢字を改造した文字チュノムを発明した。大越は、中部ベトナムの海上貿易を基盤に繁栄するチャンパーと、しばしば争った。



クメール人のカンボジア(真臘)は、西部のアンコール地域に中心をおいた九世紀から強大化し、一二〜一三世紀の最盛期には、ヒンドゥー教寺院アンコールワットや首都アンコールトムを建設した。ビルマ(ミャンマー)のエーヤーワディー川流域では、南下してきたビルマ人が、一一世紀に中流部でパガン朝を建て、海岸部にも進出した。一三〜一四世紀には、大陸部北部でタイ族の勢力が拡大し、各地に国家を建てた。

九世紀ごろからの東南アジアでは、取り入れた外来文明を消化して、独自の文化を生み出す動きがさかんになった【筆者注…この箇所は日本・東アジアの国風文化の記述と対比】。一三〜一四世紀までに各地で形成された古典文化(側注)は、その後の上座仏教化やイスラーム化などの変動をのりこえて、近代まで存続したものが多し。

(側注)

東南アジアの古典文化 インド系の文字や漢字を改造した各国の文字のほか、文学作品や歴史書、建築・彫刻や音楽・舞踊、影絵芝居などの芸術・芸能でも、外来の題材や形式を利用しながら、独自の世界が表現されるようになった。宗教面では、土着信仰がヒンドゥー教や仏教と併存または混交することが多かった。

(二一〇頁) 開発と社会変容

輸出品生産のための開発が各地で進められ、人口構成や社会構造が大きく変化するが、それは新しい民族文化やナショナルイズムを生み出すこともあった。

島嶼部では一八世紀から、オランダやスペインが、貿易を支配するそれまでの政策にかわり、領土を拡大して輸出品を生産させる政策を実施していたが【筆者注…単なる通時代的で悪逆非道な搾取でない、資本主義の発達段階をふまえた説明】、オランダは一八三〇年からジャワ島で強制栽培制度をしき、村ごとに割り当てて栽培させたコーヒール・さとうきび・藍などを独占的に輸出して、ばくだいな利益をあげた(側注1)。

人口がきわめて少なかったマレー・スマトラ・ボルネオなどの熱帯雨林地帯でも開発が進み、二〇世紀にはいるとアメリカの自動車産業向けのゴム・石油のような新しい輸出品も登場した。プランテーションや鉱山・都市などの労働力需要の多くは、インド・中国・日本などの人口過剰地域からの出稼ぎ労働者や移民によってまかなわれ、各地で人口構成が大きく変化した。また、大陸部のデルタでは水田開発が進み、島嶼部のほかインド・中国などにある、モノカルチャーで輸出品生産をおこなう地域や人口過剰地域に、米が輸出された(図版キャプション1)。



植民地支配は、東南アジアに急速な輸出と人口の増加をもたらした。ただし、輸出品がでえず開發効率が低い地域は放置された。少数のヨーロッパ人による支配を維持するために、インド人や中国人を經濟面で優遇したり、特定の民族や宗教信者ばかり官吏・軍人に採用するなどの方法によって、現地の住民は分断された(図版キャプション2)。もっとも、近代文明の流入は、西洋崇拜につながる一方で、新しい民族文化(側注2)やナショナルリズムを生み出した。近代的な教育は一部でしか普及しなかったが、それでも現状を批判したり、伝統文化の価値を再発見する知識人が出現し、労働運動やデモ・ストライキの方法も伝わった。汽船など交通・通信の發達は、華僑・印僑を急増させただけでなく、メッカ巡礼者の増加によりムスリムの自覚が高まる基盤ともなった。

### (側注)

1 強制栽培制度の影響 住民が受け取る「栽培歩合」は不十分で、主食の米生産にも影響が出たことなどへの批判が高まり、一八七〇年までに大半が廢止された。

2 新しい民族文化 マスコミヤショービジネスの成立、支配国での東洋趣味や海外旅行ブームなどに刺激されて、芸術・料理・ファッションなどさまざまな流行が生まれ、定着したものが、各地の民族文化となった。一九三〇年代

に創作されたバリ島の舞踊・音楽もその例である。  
(図版キャプション)

### 1 東南アジアの植民地經濟

主役となったのは島嶼部における一次産品の生産・輸出で、それはシンガポール経由で欧米・アジアの両方と結びついていた。輸出品生産は、家族經營の小農によるものも多かった。2 マレー半島の人口構成の変化 マレー半島の英領地域では、先住のマレー人が少数派に転落し、独立後もマレー系・中国系などの諸集團の関係をめぐって、多くの紛争が発生した。

資料2 東南アジア史に関する主な高校教員向け講演

○印は高校生・教員双方に聞かせたもの(注一六参照)  
「東南アジア史の枠組みを教える方法」第一回全国高等学校歴史教育研究会報告(二〇〇三年八月七日、大阪大学)。

「東南アジアにおける外来文明や「世界」との向き合い方」  
第二回全国高等学校歴史教育研究会報告(二〇〇四年八月一日、大阪大学)。

「新しい時代区分論」第三回全国高等学校歴史教育研究会報告(二〇〇五年八月一日、大阪大学)。

「東南アジア史 誤解と正解」第四回全国高等学校歴史教

新しい世界史叙述と歴史学入門を目指して(桃木)

育研究会報告(二〇〇六年八月二日、大阪大学)。

「東南アジア史ネタ集/Q&Aをめざして」大阪大学歴史教育研究会第十九回例会報告(二〇〇七年一〇月二〇日)。

★以上のレジュメ・資料は大阪大学歴史教育研究会HPの「活動記録」に掲載★

「東南アジア史・アジア海域史の考え方・教え方」(愛知県世界史研究会、二〇〇三年九月二一日)。

「三つの東南アジア史、そして四つ目はあるか?」神奈川県高等学校教科研究会社会科部会大会(二〇〇六年三月七日、神奈川県民センター)。

○「東南アジア史」神奈川県高等学校教科研究会・社会科部会歴史分科会世界史推進委員会夏期講座「辺境の世界史」講義(二〇〇六・八・二九神奈川県立外語短大)。

「東南アジア史をどう教えるか——わかる歴史、必要な歴史、面白い歴史——」群馬県高等学校教育研究会歴史部会講演(二〇〇七年六月二〇日、高崎女子高校)。

「(見えない東南アジア史)からの脱却をめざして——歴史研究と歴史教育を結ぶ——」第六回京都府私立中学高等学校教育研究大会・社会科分科会「高大連携による社会科教育の新しい展開」講演(二〇〇七年一〇月一四日、洛南高校・中学)。

「わかる歴史・面白い歴史・役に立つ歴史——東南アジア史の挑戦」福井県高社研歴史・社会部会講演会(二〇〇九年二月一七日、福井県立図書館多目的ホール)。

「東南アジア史から二〇世紀を考える」北海道高等学校世界史研究会四〇周年記念シンポジウム「高校生に教える『二〇世紀』とは」(二〇〇九年八月七日・北海道大学)。

二〇世紀の東南アジア史」三重県高等学校社会科研究会講演(二〇一〇年七月一日・伊賀上野市)。

○「二〇世紀の東南アジア」神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会高大連携の試み「近現代のアジア世界をどう教えるか」(二〇一〇年八月三日、於栄光学園)。

「高校教員が東南アジア史を積極的に教える気になるとぐちはどこにあるか」岐阜県高等学校教育研究会公民地歴部会講演(二〇一一年一月一八日・於岐阜県総合教育センター)。

「普通の高校教員が東南アジア史を積極的に教える気になるいとぐちはどこにあるか」(栃木県高等学校教育研究会地歴・公民部会、二〇一一年五月二四日、於栃木県立博物館)。

○「フランスのアジア進出と東南アジア世界」 神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会高大連携の試み「ウエスタンインパクトをどう教えるか」(二〇一一年八月三日、於栄光学園)。

○「一八世紀の東南アジア世界」 神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会高大連携の試み「一八世紀のアジアをどう教えるか」(二〇一二年八月七日、於栄光学園)。

「東北地方でわざわざ東南アジア史を学ぶ意味を明示できる歴史学と歴史教育は可能か？」(宮城県高等学校社会科(地歴史科・公民科)教育研究会歴史部会例会、二〇一二年八月九日、於仙台二高)。

「二一世紀の世界史教育と東南アジア史」(京都府高等学校地理歴史科・公民科研究会創立二〇周年記念講演会、二〇一二年一〇月一九日、於キャンパスプラザ京都)。  
「高大連携でつくる新しい歴史教育」普通の教員が教えられる東南アジア史に向けた取り組みから」(第五回全国歴史教育研究協議会「全歴研」大会記念講演、二〇一三年八月一日、於ワークピア横浜)。

○「現代の東南アジア世界」 神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会高大連携の試み「現代のアジアをどのように学ぶか」(二〇一四年八月一三日・於建

長寺)。

○「近世の東南アジア世界」 神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会高大連携の試み「近世のアジアをどのように学ぶか」(二〇一五年八月三日・於鎌倉学園)。

**資料3** 二〇一五年度一学期歴史学方法論講義「歴史研究の理論と方法」第一回配付資料(一部改変)

講義題目…歴史研究の理論と方法(高度教養教育Ⅱ知のジumnasティックス科目、未来共生イノベーター博士課程教育プログラム科目)

授業の目的…(学部) 世界史(東洋史・西洋史)・日本史を区別せずに、歴史学全般の研究動向や研究方法を把握することを通じて、3年次以降の専門研究に備えることを第一の目標とする。教員免許を取るため、あらためて歴史学とはどんな学問か理解したい、個別専門研究の全体への意味づけを考えたいなどの目的をもつ学部・大学院学生(史学系や文学部以外も含む)が、歴史学の全体像を把握することが第二の目標である。

(博士前期・修士課程) 史学系の学部2回生必修の講義と合同でおこなう大学院講義で(今年度の大

新しい世界史叙述と歴史学入門を目指して（桃木）

学院新入生が2回生のときに受講したものとほかなり内容が違うので、あらためて受講することが望まれる）、大学院での研究やその成果発信をおこなうのに必要な、歴史学全般の状況や方法論を理解することを第一の目的とする。教員免許を取るため、あらためて歴史学とはどんな学問か理解したい、個別専門研究の全体への意味づけを考えたいなどの目的をもつ大学院学生（史学系や文学研究科以外も含む）が、歴史学の全体像を概観し評論や解説をおこなうための知識や方法を学ぶことが、第二の目的である。

授業計画・桃木至朗・川合康・秋田茂の三人が分担し、歴史学の新しい方法論や考え方・課題について紹介する。政治史、経済史など分野ごと、古代史、中世史など時代ごと、ヨーロッパ史、アジア史・日本史など地域ごとのそれぞれについて、特徴や問題点を把握できるように配慮しながら講義を進める。

教科書・福井憲彦『歴史学入門』（岩波テキストブックス、二〇〇六年）。受講生はかならず、それぞれ一回で取り上げられる章を事前に読んでおくこと。ただし日程欄で示したように、教科書の特定の章に対応しない講義をする回もある。

参考文献・授業中に指示する

成績・出席五〇%、レポート五〇%

オフィスアワー・水曜四限（桃木）、水曜四限（川合）、

水曜三限（秋田）

コメント（備考）・日本史学、東洋史学、西洋史学の三専修の学部二年生は必ず履修すること。

メッセージ・日本の歴史学界は世界有数の研究水準を誇るが、しかし他分野の研究者を含む専門外の人々への発信・解説の能力、専門家の間での批評・評論の能力を組織的に涵養する仕組みが決定的に欠けている。この授業は、専門性に加えてそうした越境ができる「歴史コミュニケーター」を養成する取り組みの一環で、この授業が歴史学の見取り図、CSCD科目「市民のための世界史S」（または教養課程「市民のための世界史I〜V」）が世界史の見取り図をそれぞれ提供し、文学研究科「世界史演習」でそれらの解説・発信の訓練をするという関係にある。条件と意欲のある学生はすべて履修していただければ、高校や大学の教育から学界での他流試合まで通用する、汎用性の高い能力が身につくはずである。

日程と担当教員

第一回 四月八日 イントロダクション・阪大史学

の挑戦 桃木・川合・秋田

第二回 四月一五日 歴史学はなにを問題にしてきたか・こなかったか(一章) 桃木

第三回 四月二二日 史料・資料とはなにか(二章) 川合

第四回 五月一三日 環境と人類の歴史(三章) 秋田

第五回 五月二〇日 時間の認識と時代区分(四章) 秋田

第六回 五月二七日 ローカルな歴史とグローバルな歴史(五・六章) 秋田

第七回 六月三日 政治・権力・軍事の歴史 川合

第八回 六月一日 暮らしと経済の歴史 秋田

第九回 六月一七日 文化・情報とメディアの歴史(二一章) 桃木

第一〇回 六月二四日 社会と共同体の歴史 川合

第一一回 七月一日 ジェンダーの歴史、家族の歴史 桃木

第一二回 七月八日 歴史と記憶または歴史と現在(一二章) 川合

第一三回 七月一五日 見えない歴史をどう見るか 桃木

第一四回 七月二二日 歴史研究と歴史教育のしくみ 桃木

みはどんな特徴をもつか 歴史教育研究会  
若手ゲスト

第一五回 七月二九日 まとめ・補足・総合討論 桃木・川合・秋田

#### 資料4 『市民のための世界史』の主な内容

##### (章立て)

序章 「なぜ世界史を学ぶのか」

第一章 「古代文明・古代帝国と地域世界の形成」

第二章 「地域世界の再編」

第三章 「海陸の交流とモンゴル帝国」

第四章 「近世世界のはじまり」

第五章 「大航海時代」

第六章 「アジア伝統社会の成熟」

第七章 「ヨーロッパの奇跡」

第八章 「近代化の広がり」

第九章 「ウエスタン・インパクト」とアジアの苦悩

第一〇章 「帝国主義とアジアのナショナリズム」

第一一章 「第二次世界大戦とアジア太平洋戦争」

第一二章 「冷戦と民族独立の時代」

第一三章 「現代世界の光と影」

終章 「どのように世界史を学ぶか」

新しい世界史叙述と歴史学入門を目指して(桃木)

(コラム一覽)

序章「気候変動の原因と研究方法」「自然と人間」

第一章「青銅器の東方伝播」「前二千年紀の世界」「騎

馬遊牧文化は東方から西方へ」「ヘレニズム」「世界

帝国」の統一政策に見る共時性」「古代文明と宗教」「三

世紀の危機」

第二章「中華世界に生きる騎馬遊牧民の文化」「ソグド

人と東西交易」「日本の伝統」の成立」「唐帝国とイ

スラーム帝国」

第三章「地中海交易の変遷」「遊牧帝国としてのモンゴ

ル帝国の特徴」「気候変動の社会への影響」

第四章「鄭和の航海」「朝貢・冊封と朝貢貿易」「明の

海禁と琉球の繁栄」「ルネサンスと「暗黒の中世」

第五章「近代世界システム論」「グローバル化の歴史的

起源論争」「日中貿易の担い手たち」

第六章「清とヨーロッパの相互認識」「東アジア各国の

食生活の変化」「近世東アジア諸国の共通性と差異」

第七章「財政軍事国家論」「資本主義と奴隸制」「砂糖

と茶が動かした世界史」

第八章「自由貿易帝国主義論」「近代家族」

第九章「シャムの王室主導による近代化」「新しい民族

文化」「植民地支配の諸類型」、

第一〇章「二〇世紀の戦争、二一世紀の戦争」「インド

ネシアの模索と苦悩」「中華民国の民族政策と国民党

の政治体制」

第十一章「アメリカの大衆社会」「一九三〇年代の国際

経済秩序と日本の経済外交」「全体主義国の共通点と

差異」「日本軍が残したもの」「日本の敗戦(終戦)

はいつか」「日本は「だれとだれ」「なにとなに」の

戦いに負けたのか」

第十二章「周辺諸国にとつてのベトナム戦争」「社会主

義とは何だったか」

第十三章「経済成長と民主化」「グローバル化時代の文

化と思想」「日本の「自由主義史観」と、歴史認識を

めぐる近隣諸国との対立」

終章「大阪大学の史学系の特色」「外国史系の学生はな

にを学び、どんな力をつけるか」

(問いかけの例)

序章冒頭「歴史というのは(1)すでにわかっている(=

動かない)、過去のことを、(2) 暗記するだけの、(3)

現在や未来とは関係のない(=役に立たない)科目

だろうか?」

序章途中「日本の歴史の試験(とくに大学入試)は、

なぜ圧倒的に暗記に重点を置くのだろうか。他の科目



と共通の理由と、歴史や政治経済に固有の理由の両方を考えてみよう」

**第一章まとめ**「世界史上の古代帝国の民衆（帝国のどの部分のどんな民衆かも考えよ）にとつて、帝国の全盛期が必ずしも一番幸せな時代でなかったことを、複数の帝国の例をあげて説明せよ」

**第三章途中**「モンゴル帝国の出兵を撃退した日本や大越・ジャワ、服属前に猛烈に抵抗した高麗などの国家には、国家の基盤や構造、位置と規模、自意識などの側面で、どんな共通点があったか考えてみよう」

**第三章まとめ**「モンゴル帝国と現代のアメリカ合衆国との共通点について、政治権力（リーダーの選ばれ方や権力の構造）と社会・文化のしくみ、軍事と経済のあり方や両者の関係などを中心に整理せよ」

**第四章途中**「（明の洪武帝が民衆教化のために発布した「六論」について）清の康熙帝や江戸幕府の徳川吉宗もこの「六論」を民衆に広げようとした。こうした国家（君主）が民衆に道徳を教えるという発想は、世界中に見られるだろうか。調べてみよう。また東アジアでこの発想が広まったのはなぜだと考えられるか、討論してみよう」

**第六章冒頭**「鎖国日本」をはじめ、大航海時代以後の

アジア諸国は、「世界の動きをよそに」「眠り込んでいたのだろうか？」

**第六章まとめ**「この時期（近世後期）一八世紀前後）に固まった日中両国の社会的・政治的伝統のうち、明治以後の日本と、二〇世紀末からの中国のあゆみに影響したことがらを、それぞれあげよ。その際、日中共通の点と対照的な点に注意すること」

**第八章冒頭**「イギリスの唱える自由貿易体制に反対・抵抗したのは、どんな国や人々だったろう。すべて頑迷な保守派だったろうか」

**第八章途中**「歴史学や世界史以外の学問や中学・高校の授業科目には、どんな点に「ヨーロッパ中心主義」があらわされているか、日本やその他のアジア諸地域の扱いと比べながら考えてみよう」

**第八章まとめ**「一八〜一九世紀のヨーロッパ・アメリカで創り出され、現在まで「近代国家」「近代社会」のモデルとなっているしくみはどんなものか。政治と国家の形態、経済と暮らしの仕組み（家族のあり方などもふれてよい）について説明せよ」

**第一〇章まとめ**「辛亥革命後の中国が、革命前に孫文が唱えていたような漢民族だけの独立国家にならなかった（なれなかった）のはなぜだろうか？ 漢

新しい世界史叙述と歴史学入門を目指して（桃木）

民族と少数民族の両方の立場から、また安全保障と歴史の重みのふたつの面から考えてみよう」

**第一章冒頭**（第二次世界大戦で）日本が戦争した相手はアメリカだけだったのだろうか」

**第一章まとめ**「日本がアジア太平洋戦争でアジア諸国に負けた側面を示すできごとを、三つ以上あげよ」

**第二章冒頭**「東西両陣営の中心だったアメリカとソ連に、共通点はなかっただろうか。それぞれの「夢」を含めて考えてみよう」

**第二章まとめ**「第二次世界大戦後長い間、社会主義はアジア・アフリカで人気があった。その理由はなぜか、整理してみよう」

**第三章まとめ**「東アジア諸国で他の地域と比べて突出した少子高齢化が進行しつつあるのはなぜか、人口が増えている地域や少子高齢化がそれほど進んでいない地域と比較しながら、歴史的背景を説明せよ」

**終章まとめ**「歴史学を学んだことが生きる職業・社会活動には、歴史の研究者や教員以外にどんなものがあるだろうか」

（大阪大学大学院文学研究科教授）